

氣経絡調整師育成講座

1. 東洋医学・経絡概論	1P
2. カラーセラピー	7P
3. 脈診	10P
4. 馮天有の治療	12P
5. 羅天清治療①	12P
6. 羅天清治療②	12P
7. テラヘルツ・ホルミシスの効果	13P
8. 医師法・薬事法	18P

1.東洋医学・経絡概論

東洋医学とは、中国や日本に古来からあった医学で、鍼灸・あんま・漢方薬・柔導整復術（柔術の関節技）などを総称します。東洋医学の発祥は、三千年～四千年も前になります。

東洋医学には、必ずしも鍼灸や漢方薬をつかうのではなく、自然科学に基づいて、人体を宇宙の一部として捉え、環境からの影響にも対応できるような人体作りを考える治療法を行うものです。独自の診察法と治療法があり、両方が一体となって施術が行われます。身体に現れるどんなに小さな反応や症状でも、身体全体の問題と診て、経穴（ツボ）や経絡（内臓と穴、身体全体のながれ）を通して調整や治療を行います。身体全体を本来の健康な状態に回復させることで個別箇所の病症を取り除こうとする治療法です。人間の持っている自然治癒力（抵抗力・免疫力）を積極的に高めることを目的にした全体治療です。副作用の無い予防的な治療法とも言えます。

東洋医学の科学的な研究も古くから続けられています。穴（ツボ）に鍼や灸等の刺激を与えると、神経・内分泌（ホルモン系）・血液性状に変化が起き、疾病治療や病気の予防に役立つ事が解っています。

社会の発展にともない、常に緊張を強いられるストレスの多い社会に生きていく現代人や高齢化社会で長寿者が増えるにつれ、東洋医学が活用される傾向は、ますます強くなっていくと思われます。

東洋医学の基本 陰陽五行説

陰陽とは

古代中国の賢人たちは、我々を含む自然界の一見普遍的な繰り返しの中に常に変化し続ける万物の姿を見出しました。つまり、万物は固定化された“モノ”ではなく、流動変化している“現象”なのだということです。そして、この変化の基本原理を“性質の相反する2つの要素の絡み合い”として捉え、最も端的なイメージである光（昼）と影（夜）からとって、陰陽という抽象概念で総括したのです。注意すべき点は、“陰・陽”は常に相対的概念です。

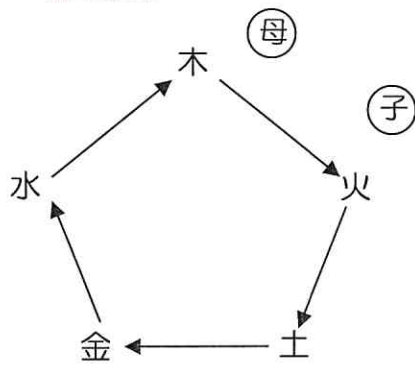
陰陽の分類

陽	上	浮	天	明	六腑	気
陰	下	沈	地	暗	五臓	血

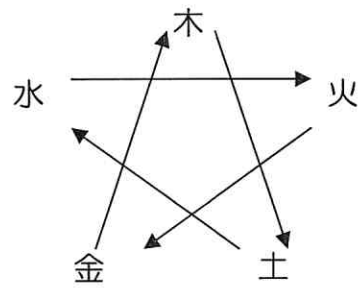
五行説

「五行説」とは自然界における「陰陽」の変化を五つの基本的属性（木・火・土・金・水）の働きによって説明した理論です。自然界の変化は「陰陽」を基本とした「五行」の循環によって営まれている。「五行」の働きは大きく二つに分かれており、平衡が保たれた状態を「相生関係」、平衡が破れた関係を「相剋関係」と呼びます。

相生関係



相剋関係



相生関係

相生関係とは相手を発生させる働きです。すなわち、自分自身に変化して新しいものを生み出すことであり、木→火→土→金→水→木の順序で常に規則正しく変化します。

- ①「木(燃える物)」からは「火」が生まれる。
- ②「火(熱を持った物)」は燃え尽きた後「土」に変わる。
- ③「土(栄養分を蓄えた物)」は積み重なって「金」に変化する。
- ④「金(硬い物)」からは「水」が湧き出す。
- ⑤「水(流れる物)」は木を发育させる。

このような「五行の相生関係」によって自然界の調和は保たれています。

母子関係

「五行の相生関係」を保った隣接する二者間相互を「五行の母子関係」とも呼びます。例えば「木と火」の「相生関係」を見てみると、「木」は「火の母」に相当し、逆に「火」は「木の子」に相当する為、「木と火」の関係は「母子関係」にあります。

相剋関係

「母」の力が強すぎたり、「子」の力が弱すぎると自然界のバランスは崩れてしまいます。「水と木の母子関係」で考えてみると、①「母の水」の力が強すぎると「木」を飛び越えて「火」まで影響を及ぼし、「水」は「火」の機能を抑えてしまう。「子の木」の力が弱い場合も結果的には同じことがいえる。

同様に、

- ②「木」は「土」の栄養分を奪い取る。
- ③「火」は「金」を溶かしてしまう。
- ④「土」は「水」を吸い取り、流れなくする。
- ⑤硬い「金」は「木」を薙ぎ倒してしまう。

このように五行の属性関係において、相手を克服し、相手の機能をなくす関係を「五行の相剋関係」と呼びます。

五行説の応用

五行の基本属性(木・火・土・金・水)に基づいて自然界の現象が五行に分類されています。季節は春・夏・土用・秋・冬、となる。また人体においても、まず内臓を臓(実質性臓器)と腑(中空性臓器)に分け、五臓は肝・心・脾・肺・腎、五腑は胆・小腸・胃・大腸・膀胱となります。

五行の配当表

五行	木	火	土	金	水
五季	春	夏	長夏	秋	冬
五臓	肝	心	脾	肺	腎
五腑	胆	小腸	胃	大腸	膀胱
五色	青	赤	黄	白	黒

基本属性以外の分類においても「相生・相剋関係」が成立します。例えば季節では「水」に該当する「冬」の力が強いと、「春」を飛び越え、「火」に該当する「夏」にまで影響を及ぼし、冷害が発生します。

五臓においては「木」に該当する「肝」の働きが正常であれば、きれいな血液を「心」に送れるが、「肝」の働きが悪くなると、「土」に該当する「脾・胃」に影響を及ぼし、食欲不振・嘔吐などの症状が現れると考えられます。

経絡

東洋医学では、人間の身体を循環する「気」というエネルギーがあると考えられています。「気」が正常に循環していることで健康を保っているのです。逆に「気」の流れが滞ると不調が生じます。この「気」の通り道を「経絡」と呼び、この経絡上に無数のツボが存在します。「気」の滞っていた部分のツボを刺激することによって身体全体の経絡が再び正常に循環し、体調を整えるのです。

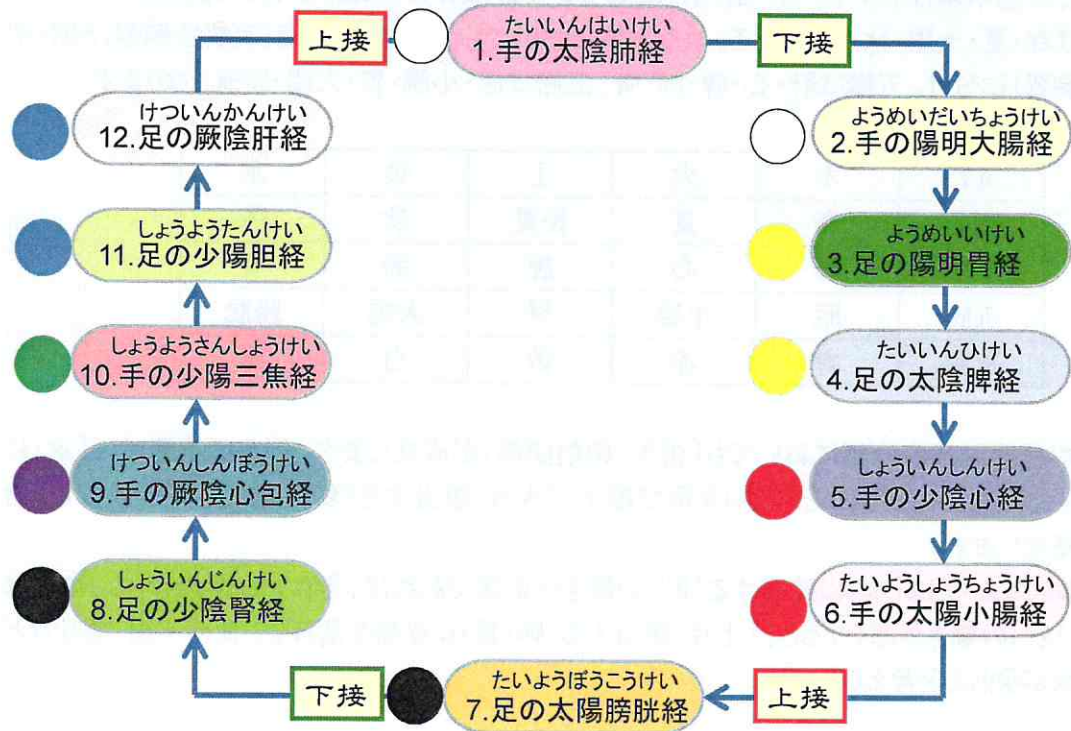
経絡は正経 12 の経絡と奇経 2 の経絡があります。各内臓に対応した 12 の経絡が「手の太陰肺経」「手の陽明大腸経」「足の陽明胃経」「足の太陰脾経」「手の小陰心経」「手の太陽小腸経」「足の太陽膀胱経」「足の小陰腎経」「手の厥陰心包経」「手の小陽三焦経」「足の小陽胆経」「足の厥陰肝経」で 12 正経と呼ばれ、「手の太陰肺経」から「足の厥陰肝経」まで高速で循環しています。さらに 12 正経のバランスを整える「督脈」と「任脈」を合わせて正経 14 経といいます。

経絡が身体に及ぼす関係は、全身の細部に渡り、内臓や皮膚など内面・外面を問わず大きな影響があります。経絡に異常が起こると、生命エネルギーの循環が妨げられる為に身体の自然治癒力・自己免疫力が低下してさまざまな症状が出てきます。

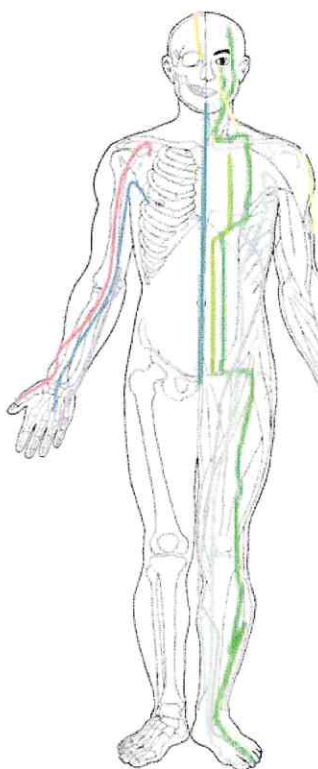
経絡で体調を調整するということは、自律神経を正常に働かせることにつながると私は考えています。全身を網羅する 14 の経絡は人が生きていくうえで必要な「気」を運ぶ役割を持っています。ツボを刺激することで、経絡の流れがよくなり、身体の各部位にエネルギーが供給され、健康を取り戻すことができるのです。

経絡の色

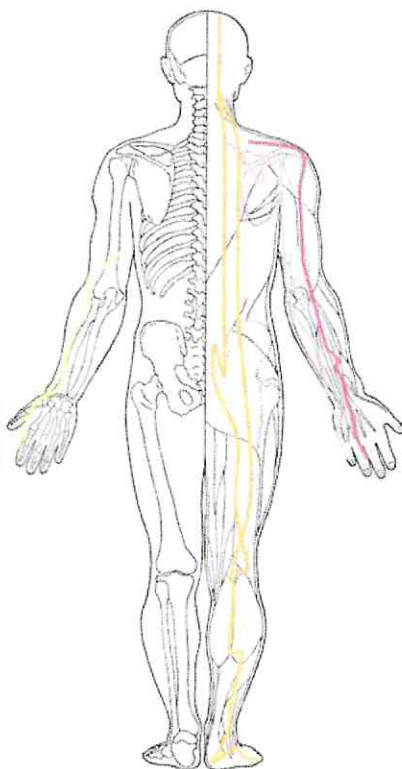
上接・下接（佐藤理論）



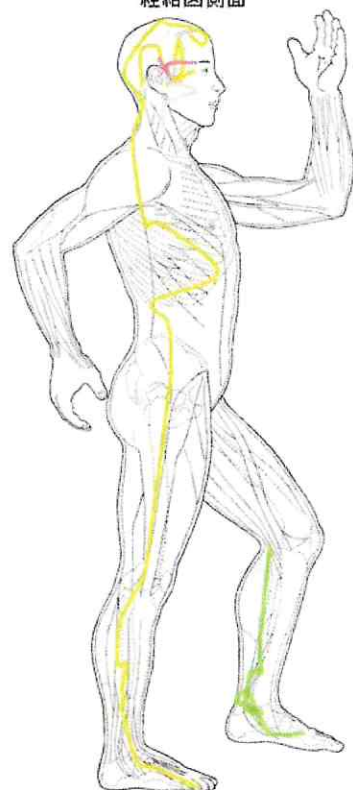
経絡図前面



経絡図背面



経絡図側面



ししん 四診

東洋医学の治療は、証を決めることから始まります。証がわからないと具体的な治療をすることはできません。細かい診察で、体や心についてさまざまな情報を入手して証を決めていきます。証を決めるための診察法は、望診、聞診、問診、切診の四診です。四診によってバラバラに得られた情報を統合的に分析し、統一体観をはじめとする東洋医学理論にてらしあわせて、証が決定されます。

ぼうしん
望診・・・目で観察する。体型や動き方、とくに顔面をみ、舌の状態をみる舌診もある

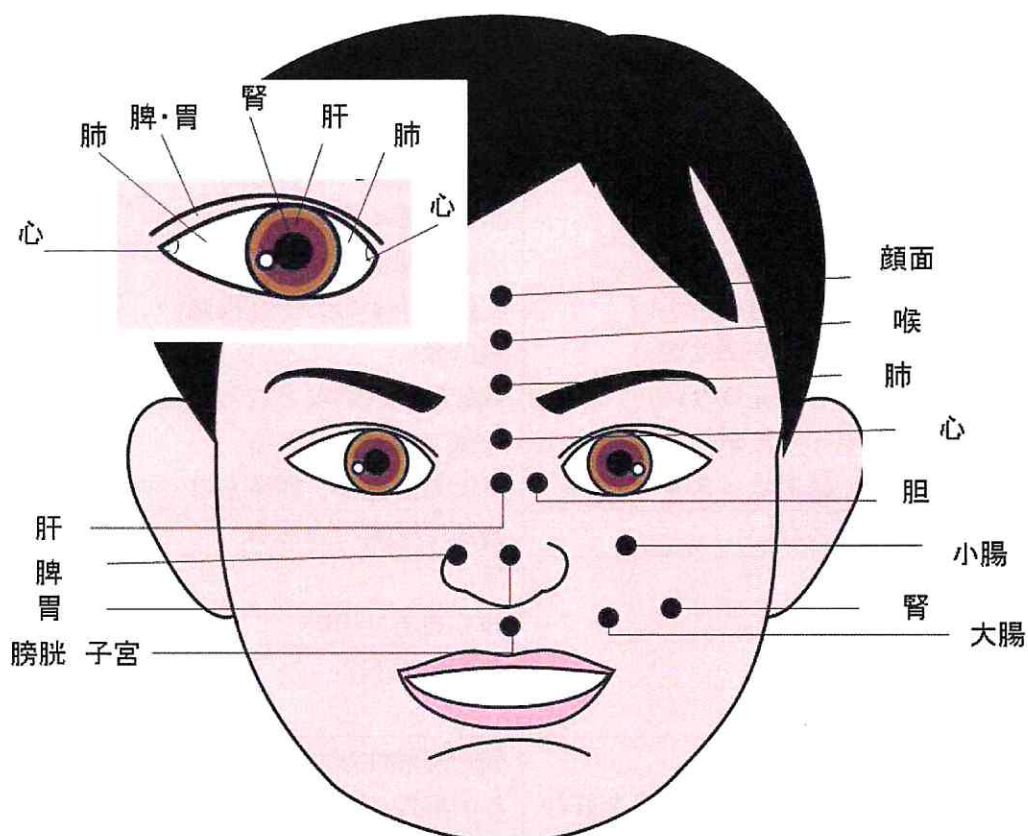
ぶんしん
聞診・・・声や呼吸音、話し方、咳の音などを聞く。口臭や体臭をかく。

もんしん
問診・・・痛み、熱など自覚症状や食欲、睡眠の具合、既往症など、さまざまな質問をして情報を集める。

せつしん
切診・・・患者に触れて診察する。脈を調べる脈診や腹部を調べる腹診がある。

望診

体型、体格、顔色、肌のつや、姿勢、歩き方など全身の動きに異常がないかチェックする。このように目で観察する診断を望診という。目で観察、望診で大事なのは顔をよくみること。皮膚の色が変わっていたり発疹がでている部位から、どの臓腑が病気か判断できます。



虚証と実証

虚証と実証とは病気の状態、つまり正気と邪気の抗争状態を示します。

正気とは、人は簡単に病気にかからないような力をもっています。また病気になったときには治ろうとする力をもっています。抵抗力や自然治癒力といわれるものですが、これを東洋医学では正気といいます。

邪気とは、病原性の細菌ウイルス、あるいは急激な気候の変化は人体に悪い影響を及ぼす。悪い影響を与える邪悪な気、ということで体を悪くする原因になるものを邪気といいます。

実証は、正気は衰えていないが、邪気の勢いが強いためにおこる病気です。正気と邪気の両方が強いと、たたかいは非常に激しいものとなります。たたかいが激しいので症状が急性にあらわれて重いものとなり、病気の人にとってはたいへんな苦痛となります。しかし、正気が衰えることなく、そのまま邪気を抑えこめば症状は治まります。

実証の症状は、激しいが短期間で決着がつくといえます。実証は、風邪や暑邪などの外邪による病気の初期や中期、からだの中で、気・血・津液が停滞したときにみられることが多いです。たとえば、かぜをひいたときに、高い熱がでてからだの節々が痛むのは実証といえます。

虚証は、正気が衰えているためにおこる病気です。正気が弱っており、邪気も弱いときには、両者とも弱いので、たたかいは静かです。からだにも強い症状ではないが、決着がつかないために、症状は長引き、正気が虚しているので、なかなか回復せず、慢性化しやすくなります。

	陰（虚）	陽（実）
証	陰証（虚証をも含む） 顔色は青いか白い 皮膚に活沢が少ない 肥えていても筋肉軟らかい 多くは痩せていて頸は細い 気分は沈うつで元気ない あまりしゃべりたがらない 声は低弱で語尾ははっきりしない	陽証（実証をも含む） 顔色は赤く感じる 皮膚に活沢を有する 肥瘦にかかわらず筋肉硬い 頸は太い 気分は開放的なところもある 元気でよくしゃべる 声にも力あり、語尾もはっきりしている
腹部	腹は虚軟で力ない	腹部は堅実で力ある
脈象	沈 弱く力なく遅い 細少 微弱 全体に力ない	浮 強く力あり速い 全体に力ある
病情	静的で寒性傾向 寒冷の病証を訴え、多く温を好む 総体に陰気な病情を示す病症	動的で熱性傾向 外因熱性の病証を現し、多く冷を好む 総体に活気のある病情を示す病症

2. カラーセラピー 羅天清カラーセラピー

東洋医学の中にも色は、古くから存在します。中国の昔の有名な治療家の中にも「扁鵲（へんじゃく）」という人がいます。彼は70数色の色を使い、鍼、灸以外に治療によく色を使ったとされています。鍼灸でも、7色又はそれ以上を使うこともあります。

カラーセラピーでは、東洋医学やインド哲学の色の概念も取り入れ、陰陽五行説にも見られる概念で色の治癒力エネルギーに重点を置いています。人の体の中にある7つのエネルギーシステムは、光のスペクトルの色であり、虹の色である7色と対応しています。この治癒力の働きが、体の各器官の機能や感情、精神面にも影響を与え、色と密接な関係をもっていると考えられているのです。

色にはさまざまなスピリチュアルなメッセージや、心身への影響力があります。カラーセラピーでは色のエネルギーを上手に取り入れながら心と体を癒していきます。体の中や外から色のエネルギーを取り込み、色の刺激を加えることによってストレスを軽減したり、体調を整えたり、感情をコントロールしたりすることもできます。

各色の特性



主な病・症状	肺 呼吸疾患 気力低下 皮膚病（アトピーなど）喘息 大腸炎 便秘下歯痛 鼻 不眠 イライラ
主な経絡	肺経絡 大腸経絡
← → 上接・下接	肝経（青色）← 肺経（白色）→ 大腸経（白色） 肺経（白色）← 大腸経（白色）→ 胃経（黄色）
色の性質	清らか 清浄作用 清潔 元に戻す 涼しさ



主な病・症状	食欲不振 筋肉の低下 内臓下垂 便秘 下痢 糖尿 左肩こり 上歯痛 肥満 くちびる 関節痛 痩せ
主な経絡	脾経絡 胃経絡
← → 上接・下接	胃経（黄色）← 脾経（黄色）→ 心経（赤色） 大腸経（白色）← 胃経（黄色）→ 脾経（黄色）
色の性質	客観的希望 ポジティブ 陽気 明るい 元氣を得る

赤



実証



虚証

主な病・症状	心臓 小腸 言語障害 血圧 舌の異常 リウマチ 交換神経上昇 のぼせ・冷え ストレス
主な経絡	心経絡 小腸経絡
← → 上接・下接	脾経（黄色）← 心経（赤色） → 小腸経（赤色） 心経（赤色）← 小腸経（赤色） → 膀胱経（黒色）
色の性質	情熱 積極的 力強い 行動的 外向的 チャレンジ精神が強い 衝動的 喜怒哀楽がはっきりとしている 楽天的 ポジティブ

黒



実証



虚証

主な病・症状	腎臓 膀胱 生殖器 水腫 体の浮腫み 耳 骨 生命力 慢性的な不調
主な経絡	腎経絡 膀胱経絡
← → 上接・下接	膀胱経（黒色）← 腎経（黒色） → 心包経（紫色） 小腸経（赤色）← 膀胱経（黒色） → 腎経（黒色）
色の性質	礼儀作法 老化 決まり けじめ 落ち着き 疲れやすい 恐がる 怯える 根気がない

紫



実証



虚証

主な病・症状	精神的疾患 うつ 自律神経失調 大脳 松果体異状 疲労性の肩こり 腰痛
主な経絡	心包経絡
← → 上接・下接	腎経（黒色）← 心包経（紫色） → 三焦経（緑色）
色の性質	高貴 気品 神秘 直感 幻想 悲しみ 孤独 沈静 炎症押え 独り言が多い 不眠 食欲不振 幻想 幻聴 幻覚

緑



実証



虚証

主な病・症状	食欲不振 筋肉の低下 内臓下垂 便秘 下痢 糖尿 ホルモン系の異常 内臓全般の不調 頑張り過ぎ 免疫機能が不足 思考能力の低下 気力の低下 意識の混濁
主な経絡	三焦経絡
← → 上接・下接	心包経（紫色）← 三焦経（緑色）→ 胆経（青色）
色の性質	調和 自然 平和 癒し 新鮮 希望 安らぎ

青



実証



虚証

主な病・症状	肝臓の病気 目 右肩こり 肢体の痺れ アトピー 熱を下げる 副交感神経に働く 首から頭の疲れ
主な経絡	肝経絡 胆経絡
← → 上接・下接	胆経（青色）← 肝経（青色）→ 肺経（白色） 三焦経（緑色）← 胆経（青色）→ 肝経（青色）
色の性質	鎮静 炎症をおさえる クール 正義 爽快 清涼 穏便 純粋 バランス 怒りっぽい イライラする 考えがまとまらない

調整の仕方

滞っている経絡を、各色の服や小物、石などで調整することにより波動エネルギーを身体に補ってくれます。身体が色に反応する事を利用して、経絡を調整し全身症状の改善を図るものです。気の流れを整えることで、身体の中に持っている自然治癒力を引き出し無理のない調整ができます。

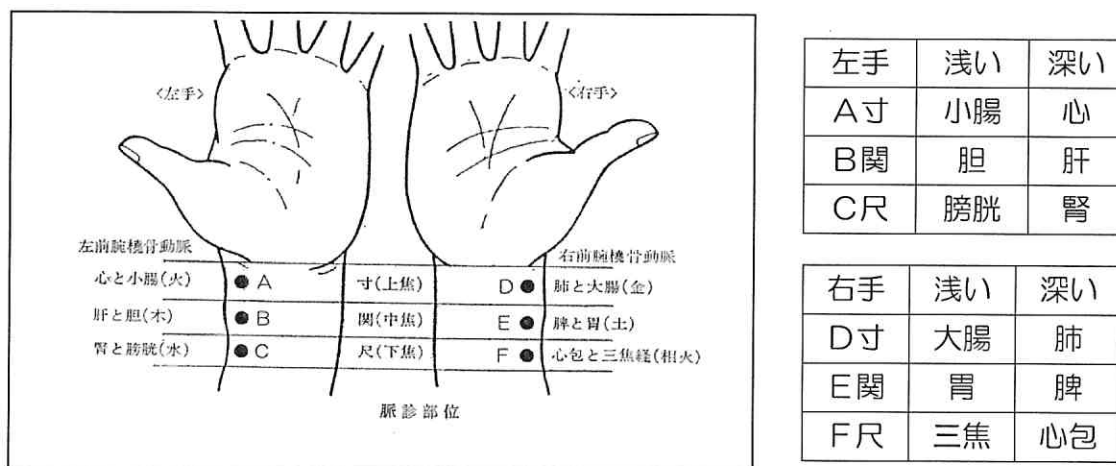
各色のテープ用意し、それぞれが対応する経絡に貼ることも一つの方法です。

3. 脈診

インドや中国医学において脈を診ることは決して心臓の状態を診るだけではないのです。全ての臓器(肝臓、腎臓、脾臓、胃腸等)の状態を診断します。考え方はこうです。心臓から拍出された血液は、動脈を通して全身にくまなく行き渡るようになっているのが普通です。ところがある内臓や組織に病変があるとその部分には血液が十分に又速やかに流れなくなります。心臓を出た血液がどの辺りの位置で流れが悪くなっているかを、脈は微妙に変化し、様々な信号を発し表現するのです。脈の状態から病気の所在、現状予後を診断します。

脈の取り方

両手首の3カ所または頸部(胸鎖乳突筋のツボ 人迎のツボあたり)



脈の種類(基本パターン)

脈位	浮脈	皮膚の表面で拍動を感じる脈
	沈脈	皮膚より深い骨の近くで感じる脈
速さ	数脈	脈が速い、心拍数が多い数多く拍動を感じる脈(心拍数 80 回/分以上)
	遅脈	脈が遅い、心拍数が少なく拍動を感じる脈(心拍数 65 回/分以下)
強弱	虚脈	拍動に力がない脈、拍動がはっきりと感じられない脈
	実脈	拍動に力がある脈 拍動が力強く大きい脈

自分で脈をとる習慣をつける

最初からすべての脈状を診ることはできないと思います。あなたが、弱いと感じている器官や以前患ったことのある臓器を診ることから始めるのがよいと思います。

まずあなたの安静時(健康と思える時)に、ご自身で脈に触れて脈状を感じ取って下さい。浮・沈まではちょっと難しいかもしれませんが、早い遅いや強弱は比較的わかりやすいと思います。

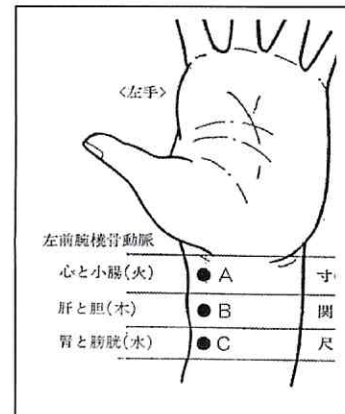
毎日脈診をする習慣をつけて自分の体に関心を持てば、絶えず自分の体を管理できるようになります。初めは難しいかもしれませんが、慣れれば誰でも簡単にできるようになります。また悪いところが判れば、それをよくするツボを刺激してやればよいわけです。そうすることによって未病の人は病気を予防することができるのです。

心房細動の場合

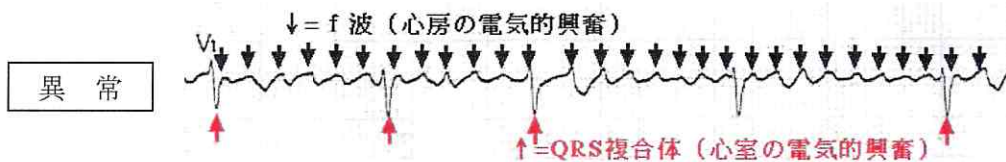
脈をとる

心房細動の脈の特徴

- ・脈は左手の寸(図-1 A)の深い位置で取ります。
- ・脈は早く感じたり遅く感じたりします。
- ・また強い弱いも安定していません。



心電図でみると



心房細動の心電図の特徴 (V1 誘導) ●心房収縮を示す P 波の消失、●不規則で、小刻みな基線のゆれ (心房細動波=f 波)、●QRS 複合体と次の QRS 複体の間隔が一定でない。心房細動では基線のゆれは、ほとんど見られないことも少なくありません。このときには、P 波がないことと QRS 複合体と次の QRS 複体の間隔が一定でないことで心房細動と診断する。

経絡で体調を整える

内関のツボや神門のツボを強く押す。

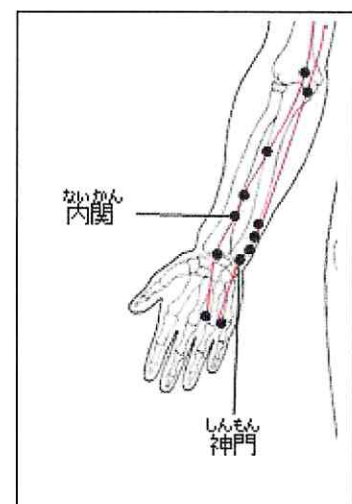
手の厥陰心包経 内関のツボ

手のひら側で手首のシワの中央から肘に向かって指幅三本分のところで、親指側の腱と次の腱との間にあります。

手の小陰心経 神門のツボ

手のひら側で手首のシワの小指側で、豆状骨 (豆粒のような骨) の傍らにとります。

内関や神門のツボを刺激することによって、精神的ストレスや心疾患による心房細動や胸部の違和感、不快感から解消されます。



4. 馮天有の治療



ふーてんゆう
馮天有師

馮天有先生は、周恩来の主治医も務め、鄧小平が「ムチウチ坐骨神経痛を治療させたら世界で一番」と自慢していた、名実ともに世界でナンバーワンの治療師です。



らーゆうめい
羅有名女師

羅有名先生は、女性の先生で、前漢時代の名医で中国医学の神様と崇拝されている華陀の再来とも言われるほどの名医です。

5. 羅天清治療①

別冊 気経絡調整法 参照

6. 羅天清治療②

別冊 気経絡調整法 参照

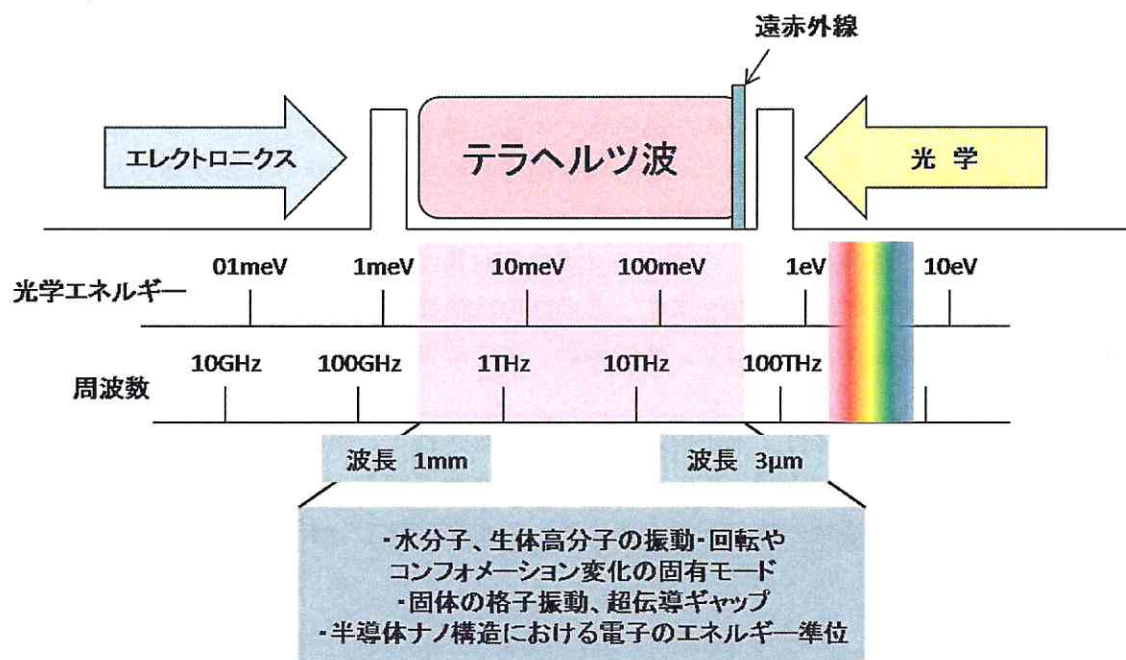
7. テラヘルツ・ホルミシスの効果

「テラヘルツ波と生命の神秘」

テラヘルツ波とは何か？

テラヘルツ波とは、光と電波の間に位置する、周波数が 1 兆 Hz (1 テラヘルツ) 前後で、波長が $3\mu\text{m}\sim 1\text{mm}$ ($1,000\mu\text{m}$) (科学振技術興機構：JST 定義) の電磁波のことで、超遠赤外線と呼ばれることもあります。光のように直進する性質と電波のように透過と吸収する性質があります。

従来の遠赤外線は波長が $3\sim 12\mu\text{m}$ で全テラヘルツ波領域の光側の端の領域の一部の光で直進性と表面での吸収性がありますが、透過性と内部吸収性はほとんどありません。この相違点が遠赤外線とテラヘルツ波とが生命や物質に与える効果が大きく異なる理由です。



テラヘルツ波には、発生メカニズムによって、磁場中での電子走査（ビーム）によって人工的に発生させるコーヒーレントなテラヘルツ波（位相や波長がそろっている単一波長の人工的な光線）と、地球上のすべての生命や有機物、無機物の分子や原子が熱振動によって放射しているインコーヒーレントなテラヘルツ波（多種類の波長で構成されている自然界の生命光線）があります。ここ数年で人工的なコーヒーレントなテラヘルツ波の発光、測定、分光などの技術は格段に進歩し、様々な分野での応用が期待されています。

一方、動物、植物、鉱物等の分子や原子の振動・回転運動、分子間相互作用、固体の格子振動などを通して、様々な自然界の物質の物性、物質情報や生命現象（細胞内の DNA や酵素等）を左右し、地球上（宇宙全体）のすべての生命や物質が放射しているインコーヒーレントな生命光線である微弱な自然界のテラヘルツ波の応用研究も進んでいます。自然界のテラヘルツ波エネルギーは人工的なテラヘルツ波に比べて放射量は 4 万分の 1 程度で極めて微弱ですが、含んでいる波長の種類が無限であらゆる生命活動に強い影響を与えています。

言い換えると、自然界のすべての生命や物質は、互いに共通のテラヘルツ波という生命光線を放射して影響を与え合い、情報を交換し合い、調和しながら共存しています。

要するに、地球上や宇宙のすべてが生きており、その生命活動の表現がテラヘルツ波の放射といえます。正に自然界の無限の愛と調和と知恵が奏でる生命の神秘です。

生命とテラヘルツ波

自然界や宇宙界の生命や物質は、すべてテラヘルツ波という生命光線を放射していますが、もっとも多く、テラヘルツ波を放射しているのは人体です。それも赤ちゃんがもっとも放射量が多くて平均放射率も高く、逆に年を経るにつれて生命力が衰えてくると平均放射率が低下していきます。病気の内臓器官や体温が低下した身体もテラヘルツ波の平均放射率や放射量が低下しています。すなわち生命活動の活発さはテラヘルツ波の放射量や平均放射率で表現されていることになります。

健康な植物や動物、食品は、テラヘルツ波の放射量が高く又平均放射率も高くなっていますが、不健康なものは逆になります。その理由は植物や動物や食品の細胞を構成している有機高分子の結晶が乱れており、格子振動（生命振動）の振幅や振動数が低下するためと思われます。

ちなみにテラヘルツ波は、水中ではほとんど吸収されてしまいますが、空気中や土中では良く透過するので、植物同士がテラヘルツ波で情報交換を行っているという植物学者もいます。地震の前に地域の竹の花が一斉に咲いて全部枯れてしまう現象も説明できるようです。

病気とテラヘルツ波

植物や動物や人間を健康にするには、細胞が自ら放射するテラヘルツ波エネルギーの放射量高めるように細胞を構成している分子の結晶構造を正常化（細胞の活性化）してやれば良いことになります。又は植物や動物の身体に外部からテラヘルツ波エネルギーを強制的に照射してやれば良い。外部からのテラヘルツ波エネルギーの照射は対症療法なので一時的に健康を回復するが、不健康の原因が消失するまで数回繰り返す必要があります。

体温を上昇されると免疫力（細胞内の HSP の増加）が高まり病気が改善し、病気にかかりにくくなりますが、この理由は体温が上昇すると細胞の有機分子や酵素、DNA 等の振動が強くなりテラヘルツ波の放射量が急上昇し、生命反応が活発になるからと思われます。逆に体温が低下すると細胞の分子等のテラヘルツ波の放射量が低下し、免疫力や自

然治癒力が急低下し、癌等の生活習慣病が発生してきます。従いまして体温を上昇させることは、生命活動の根本エネルギーが発生することになり、あらゆる病気の治癒に直結してきます。この場合の効果は、いかなる栄養食品や薬、その他の治癒方法と比較しても圧倒的な力を持つことが知られてきています。

過食を常食にすると消化するために体内のエネルギーを多量に消費し、又血液がにごったり粘ったりして全身の血行不良になりその結果、体温が低下してきます。逆に断食すると体温が上昇し体内の細胞から放射されるテラヘルツ波の放射量が増加し、生命力が活発になり、免疫力が急回復して癌を含むほとんどの生活習慣病を愕くべき短時間で改善していきます。

言い換えると、細胞内の水や有機高分子や酵素、DNA等の生命代謝構成要素のテラヘルツ波振動が低下し、テラヘルツ波の放射量や放射率が低下してくると、病気、生命力低下、老化、死という減少を発生させていくことになります。

自然界の物質とテラヘルツ波

動物や植物等の生物以外の自然界の物質もすべて、その構成分子や原子や電子の振動によって微弱なテラヘルツ波を放射しています。特に変成岩は火山岩等の高熱で固まった岩石や鉱石類や地中バクテリアの一種もテラヘルツ波の一部を放射しています。

一般的にそれらの無機物から放射されるテラヘルツ波の波長はほとんど遠赤外線領域になります。従ってそれらのテラヘルツエネルギーの効果や作用は遠赤外線領域の効果にほとんど限定されます。金属シリコン等の鉱物は加熱処理すると一部テラヘルツ波が発生しているようですが、微弱でほとんど波長が短い遠赤外線領域の光です。

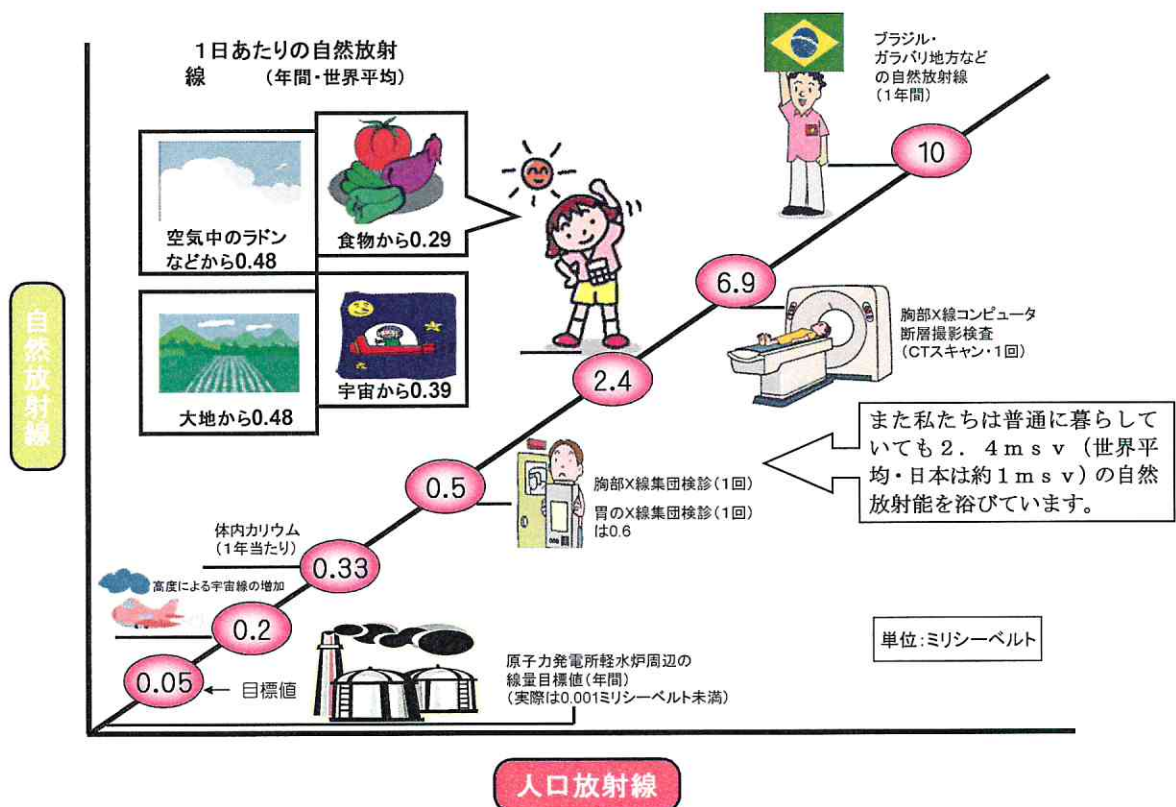
ホルミシスとは

「ホルミシス」という言葉は、「ホルモン」と同一語源のギリシャ語「hormo」に由来する言葉で刺激するとか促進するという意味を持っています。

近年、放射線影響の中には悪い影響ばかりでなく、少量の放射線は身体にとって良い影響があるかもしれないということがいわれ出してきました。微量の放射線によって傷んだ身体を修復する効果のことを放射線ホルミシス効果といいます。

放射線＝放射能という怖いイメージがありますが実は原子力発電所の近辺よりはるかに高い数値をしめしている場所があるんですよ。それはブラジルのガラバリ地方やインドのケララ地方です。また日本でも有名な温泉地なども実は高い数値をしめしています。これらの中でもガラバリ地方は年間平均被爆量が世界平均の約4倍にもなっています。また私達は、何もしなくても自然界・空気中・宇宙からと様々な所から自然放射線を年間で2.4m s v（日本は1 m s v）浴びています。

放射線は高レベルになると 原子爆弾のように一瞬にして生命体や物質を破壊してしましますが、低レベルの放射線は生命に有益な効果が生じるということを各国の科学者が発表しています。中でもアメリカのラッキー博士の「放射線ホルミシス」についての論文がそれまでの放射線の常識を180度覆しました。『微量の放射線は生殖力・免疫力を高め長生きする』また、その他の生体機能が活性化するというものでした。



放射線にはおおまかに宇宙や大地食物などから発生する自然放射線と人工的に作られる人工放射線の2種類に分類されます。自然放射線は高度や浴びる場所によっても異なりますが、地上では全く放射線のない環境や場所は存在せず、地球上の生物は皆、太古の昔から自然界の放射線を浴びながら進化を続けてきました。

また、その中で生活するうち人類はその放射線を利用することを模索してきました。現在では様々な分野で放射線が利用されています。(図1)

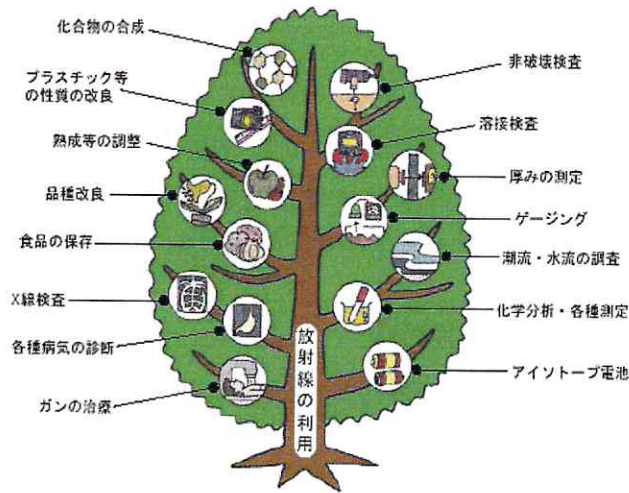


図1 出典：日本原子力文化振興財団「放射線のはなし」

放射線ホルミシス効果とラジウム温泉

日本にも秋田の玉川温泉や鳥取の三朝温泉がラジウム温泉で有名な温泉地です。地区の人に対する疫学的調査では「胃ガンや肺ガンなどある種のガンの発生率が対象地区と比較して有意に低い」ことが報告されています。さらに、動物実験モデルで低線量放射線の前照射による、高線量照射に対する抵抗性の発現、免疫の賦活化、ストレス蛋白の発現、転移ガンに対する抑制、あるいはIL-1の誘導などが報告されています。

低レベル放射線を浴びることによってDNAの損傷を抑え細胞の老化を防止する酵素が増えるからだとわかってきています。それに、ガン抑制遺伝子が活性化してガン細胞を消去する活動が盛んになることもわかってきました。

8. 医師法・薬事法

1. 医業類似行為とは

医業：医師の行う医療行為のみに使われます。

医業類似行為：疾病の治療又は保健の目的をもって光熱器機・器具その他の物を使用し、応用し、又は四肢若しくは精神作用を利用して施術する行為であって、医師の専門的知識、技能を必要しないもの（法の定義）

2. 医業類似行為の種類

(1) 法で認められた医業類似行為

①按摩マッサージ指圧師 ②はり師 ③きゅう師 ④柔道整復師

※「按摩マッサージ指圧師、はり師、きゅう師に関する法律」（通称：あはき法）は、マッサージなどを仕事とする人は、養成期間で3年以上学んだ後、国家試験に合格して得る免許が必要としている。

(2) 法に基づかない医業類似行為

①カイロプラクティック ②整体、骨盤矯正 ③気功 ④温熱・電気・光線
⑤その他

※上記のものをまとめて「療術」といいます。

（電気・指圧・温熱・刺激・手技療法による医業類似行為を業とする職業で鍼灸師、あんま、指圧、マッサージ師、柔道整復師以外のものをいいます。）

3. 療術で開業するには

「医業類似行為は、人の健康に害を及ぼす恐れのある業務行為でなければ禁止の対象にならない」（昭和35年1月27日 最高裁大法廷判決）

最高裁判所の判例により、人の体にただちに害を及ぼす恐れのある医業類似行為でないかぎり、職業選択の自由の範囲内で認められています。すなわち療術（整体・カイロプラクティック等）で開業することができます。

4. 施術院が広告できる事項（あ・は・き法による）

広告できる事項	広告できない事項
☆施術者の氏名及び住所 ☆業務の種類 ☆施術所の名称及び電話番号 ☆施術日または営業時間 ☆予約・休日・出張による施術の実施 ☆駐車場の案内	★出身校・経歴 ★流派 ★適応症（特にがん）などの誇大広告のおそれのある事項 ★所属学会 ★技能及び施術方法

◎広告等の表現で注意すること（療術）

治す× ⇒ 癒す・和らげる の表現が適当

治療× ⇒ 施術・トリートメント

【誇大広告について】

- ・「最高の技術」「最も進化した」等は最大級の表現に類するので×
- ・「血液の浄化」「～が治る」「～病に」「体質改善」「アルカリ体質に」等の表現は、本来の効用効果を誤認させるおそれがあるので×

5. 施術所の名称について

◎施術所は病院分院、産院、療養所、診療所、医院、その他病院または診療所に間違えるような紛らわしい名称をつけてはならない。

【例】 針療科、針療所、マッサージ科療院、クリニック 等

【適当な例】 東京はり治療院

◎無届医業類似行為（療術）の場合は、施術院（所）、療術院等が相応しい。

【例】 治療院、整体クリニック

【適当な例】 東京整体施術院

※療術師（カイロドクター・カイロプラクター整体師等）は治療が出来ないのに「治療院」の名称を自肅した方がいいと思われます。あくまで治療ではなく施術です。

法律的には治療院の看板をあげるだけでは、法には触れませんが、医療無免許者が自己の施設で治療行為（あんま・指圧・マッサージなどとみなされる行為）をした場合、警察から指摘されれば、あはき法違反で刑事罰を受けることになります。

6. 施術所での医療器具の取り扱いについて

◎施術中での医療器具（業務用・家庭用治療器等）の使用

*適正な使用方法

*誇大広告の禁止

【注意】

無届医業類似行為（療術）の場合、業務用の治療器での事故は保険が適用されない場合があります。

健康食品と薬事法

健康食品はあくまでも食品の一つですので、「健康食品」に薬効があるかのように標榜した場合、その「健康食品」は「医薬品」として扱われ、薬事法の規制を受けます。つまり健康食品などでその原料や販売方法などから疾病に効くというイメージを消費者に与えた場合、無承認無許可医薬品を販売したことになり、その時点で罰則条文での薬事法違反が成立してしまうのです。

健康食品が医薬品（無承認無許可医薬品）に該当する場合

「無承認無許可医薬品の指導取締りについて」（S46薬発476号厚生省薬務局長通知）で示された「医薬品の範囲に関する基準」により、次に該当するものは医薬品と見なされています。

1. 専ら医薬品として使用されている成分を含むもの
専ら医薬品として使用されている成分を含んでいるものは、例え効能効果などを何も表示せずに食品である旨が明示されてあっても医薬品とみなされます。
（例：アスピリン、抗生物質、センブリ、ゲンノショウコ など）
2. 医薬品的な効能効果を標榜したもの
疾病の治療や予防を目的とする表現
身体の組織機能の増強、増進を目的とする表現
医薬品的な効能効果を暗示する表現
3. 医薬品的な形状のもの
アンプル など
4. 医薬品的な用法用量を標榜したもの
1日2～3回食後に服用等の表示

具体例

- (1) 医薬品的な効能効果の標榜
疾病の治療または予防を目的にした表現、身体の組織機能の増強を表現することは禁じられています。
 - ガンが治る
 - 糖尿病の人のために
 - 便秘が治る
 - 慢性病に良い
 - 疲労回復、強壮、体力増強
 - 免疫細胞を活性化する
 - 自然治癒力を高める

(2) 医薬品的な効能効果の暗示

当該商品に医薬品的な効能効果を期待してしまうおそれがあるため、これらは医薬品の効能効果の標榜に該当します。

- 体質改善、健胃整腸で 知られる××を原料に・・・
- 深山高原に自生する植物△△△を主剤に、○○や××などの薬草を・・・
- 花粉症友の会、アトピー友の会・・・
- 専門家も認めた△△
- ××学会で発表された△△
- △△では伝承医学として知られる・・・
- 中国四千年の歴史に裏付けられた××

(3) 好転反応や瞑眩反応等の表現

同じように医薬品的な効能効果の標榜に該当しますが、適切な医療の機会を逸するおそれもあり、絶対に使ってはいけない表現でもあります。

- 摂取することにより一時的に下痢や発疹などの症状が出ますが、これは体内が浄化されたための好転反応です。
- 気分が悪くなるときがありますが、これは××が体内で戦っている証拠です。
- 飲み始めに体調が悪くなる事がありますが、血液がきれいになろうとする反応です。

(4) 効用、効果などの表現

成分本質や形状等に関わらず、医薬品的な効能効果を期待させるおそれがあります。

- 1カ月以上飲み続けないと効果がありません。
- 医薬品のような即効性はありませんが、1週間ほどでその効きめがおわかりになります。
- 効果が思わしくなくてもそのまま根気よく続けていけば、次第に効果が現れます。

(5) 用法・用量に関する表現

医薬品は食品とは異なり、適応疾病に対し、治療または予防効果を発揮し、かつ安全性を確保するため服用時期、服用間隔、服用量等の詳細な記述が必要になってきます。(調理等の目的のために使用法、使用量等を定めているものについては除外)

- 1日2～3回の・・・
- 1日2、3粒ずつ・・・
- 毎食後、添付の小さじ2杯ずつ
- 成人1日3錠

